研究課題名：日本歯科医師会の標準的な成人歯科健診プログラムの『歯の健康力』と産業歯科保健活動受診者の口腔内状態との関連性についての調査研究
－職域での効果的なオーラルヘルスプロモーション施策の提言を目指して－

研究者名　：市橋透[1、5]、藤井由希[1]、関根千佳[1]、座間聡子[2]、大山篤[3]、藤田雄三[4]、武藤孝司[5]

所　　属　：[1]（公財）ライオン歯科衛生研究所、[2]株式会社神戸製鋼所加古川製鉄所 [3]株式会社神戸製鋼所東京本社健康管理センター、[4]藤田労働衛生コンサルタント事務所、[5]獨協医科大学医学部公衆衛生学講座

【目的】

職域での効果的・効率的なオーラルヘルスプロモーション施策の提言を目指し、全員参加方式で産業歯科保健プログラムを初めて導入した事業所で、日本歯科医師会が作成した「標準的な成人歯科健診プログラム」(以下、日歯プログラム）の質問票の項目を含む質問調査項目と口腔内診査結果から『歯の健康力』と関連性のある要因を明らかにし、保健指導に役立つ情報を提供することを目的に行った。

【対象および方法】

解析対象者は 2013 年度から全従業員（約 2,500 人）を対象に歯科健診を実施した某製造業の従業員のうち、5 月から 9 月までの歯科健診に参加し（1,110 人)、歯科健診結果と質問紙調査の揃った 1,039 人（43.4±12.2 歳）である。日歯プログラムの質問票で要受診勧奨型の該当項目の 9 項目について「好ましくない回答」を 1 点とし、4 点以下を「非受診勧奨型」、5 点以上を「受診勧奨型」に分類した。さらに口腔内診査結果から「非要受療型」（未処置歯が無く、かつ歯周ポケットの無い者）と「要受療型」（未処置歯または歯周ポケットの有る者）とした。目的変数を「要受療型」「非要受療型」、説明変数に日歯プログラムおよび健康行動などの質問項目を用い、ロジスティック回帰分析により要受療型に関連する要因を解析し、選択された要因を点数化して要受療型と非要受療型との間の敏感度と特異度を求めた。

【結果】

要受療型と関連のある要因はオッズ比（OR）の高い順に、歯ぐきの腫れ（3.04)、年齢階級（2.74)、就寝前の歯みがき（2.23)、むし歯の有無（2.06)、デンタルフロス（1.93)、喫煙習慣（1.91)、かかりつけ歯科医院（1.61)、自分の口腔への満足度（1.48)、しみる（1.41）の 9 項目であった。この 9 項目を点数化して要受療型、非要受療型との ROC 曲線を求めた結果、3 点以下と 4 点以上で領域積が最大であった。この点数区分による要受療型間の敏感度は 0.78、特異度は 0.58 で最も高い値を示し、受診勧奨型での点数による要受療型、非要受療型間の敏感度 0.75、特異度 0.46 よりも高い値を示した。

【まとめ】

要受療者を把握する上で「歯ぐきの腫れ、年齢階級、就寝前の歯みがき、むし歯の有無、デンタルフロス、喫煙習慣、かかりつけ歯科医院、自分の口腔への満足度、しみる」の 9 項目は有用な情報と考えられ、3 点以下と 4 点以上で要受療者を効率よく分類できる可能性が示唆された。今後、さらに精度を向上し一般化していくには、異なる対象などで再現性や質問項目の検証を行っていく必要があると考えられた。